

(報告書)

ネパール、グルン社会における若者組ロディと喫煙文化に関する社会人類学的研究

助成研究者 吉元菜々子（首都大学東京大学院）

1. 研究目的

本研究は、中央ネパールの中山間地帯に主に居住するグルンと呼ばれる人々の社会を対象とし、たばこの贈与や交換を含む広義の喫煙行為の社会的意味を、特にグルンの若者組ロディという社会的制度に着目しつつ通時的視点から明らかにすることを目的としている。具体的には、①かつて若者組ロディの集まりにおいて、たばこの贈与や交換を含む喫煙行為が男女間のコミュニケーションにおいていかなる機能を担っていたのかについて検討し、グルン社会における社会制度と喫煙文化の絡み合いを紐解く。②男女双方に親しまれていたたばこがいかにして現在のように男性のものとなり、女性の喫煙は道徳的に反するものとして語られるようになったのか、その歴史的変遷を明らかにする。③現在のグルン社会における喫煙文化を過去との比較を含めて明らかにする。以上、三つの課題を検討することによりグルン社会における喫煙文化を総体的に描き出すとともに、グルン社会独自の若者組ロディとたばこの結びつきについて考察する。

2. 研究方法

本研究では、ネパールのグルンの村落における実地調査と文献研究を行った。実地調査では、筆者がこれまで長期調査を行ってきたカスキ郡のC村において聞き取り調査を行い、ロディにおいていかにたばこの贈与や交換が行われていたのかという点を中心に当時のロディでの喫煙行為の様子を語ってもらった。それに加えてラムジュン郡のグルン諸村落を訪問し、C村において観察される現在の喫煙層や喫煙に関する道徳規範等の基礎的な情報を収集したほか、C村において行ったのと同様の聞き取り調査を行い、データの蓋然性や地域偏差を確認した。なお、実地調査は2016年6月～7月、9月～12月、2017年1月～3月のネパール滞在期間中に断続的に行った。文献研究ではグルンに関する民族誌的資料を用いて若者組ロディやその他社会制度のかつての様子について明らかにし、実地調査で得たデータの比較資料にしたほか、ネパールのたばこ産業や喫煙文化に関する資料を収集し、グルン社会を取り巻くマクロな状況を把握した。

3. 研究成果

3. 1. グルン概要

グルンとは中央ネパールの山間地帯を故地とする人々である¹。2011年に行われた国勢調査

¹ グルンとは他称であり、彼らの自称はタム、もしくはそれに複数形を付けたタムマイである。1990

によると、グルンの人口は 522,641 人であり、ネパール全人口中の割合は約 1.9%である [Central Bureau of Statistics 2012]。グルンの人々は、中央ネパールに位置するネパール第二の都市とも言われるポカラの周辺の中山間地帯に多く居住しており、また東ネパールにも一部居住している²。ネパールの公用語はインド・ヨーロッパ語族のネパール語であるが、グルンの母語はチベット・ビルマ語族のグルン語である。

現在のグルンの生業は農業と出稼ぎによる収入が中心である。かつて生業の中心は農業に加えて牧畜と交易であったと言われているが [Messerschmidt 1976: 33-35]、現在交易はほぼ行われておらず、また牧畜に従事する人口も年々減少している。さらにかつてはグルカ兵と呼ばれる英国インド軍への傭兵を多く輩出していたが、それに加え近年では中東を中心とした海外への出稼ぎ移民が増加している。

3. 2. グルン社会におけるかつての喫煙風景

グルン語で歌われる有名な歌謡曲の一節に、「たばこを吸いに来ないか」と男性が女性を誘う歌詞がある。この歌詞の内容は、現代のグルン村落の様子と照らし合わせると不自然なものである。というのも、現在グルン村落における主な喫煙者は男性だからである。しかしながら、この歌詞がグルン社会を全く反映していないというわけではない。男性のほかにも、年配の女性が喫煙している姿を頻繁に目にすることができるからである。

グルンにおける喫煙文化や喫煙の様子に関しては、先行研究ではほとんど記述されてこなかった。ほぼ唯一グルン村落における喫煙の様子について記しているのが、グルンに関する最初の本格的モノグラフを書いたベルナール・ピネードである。1950年代後半にカスキ郡のグルン村落を中心に現地調査を行ったピネードは、習慣や身体技法について以下のように記している。

村人は喫煙量が多く、主に輸入物のインドたばこを吸う。たばこに火をつけて数回吸入すると、それを隣の人に渡す。たばこには口をつけない。たばこは人差し指と中指の間に垂直にはさみ、すべての指を手のひらに向かって折り曲げる。吸入は、親指と折り曲げた人差し指の間にあるわずかな隙間から行われる。女性は、指を手のひらのほうに折り曲げ、小指で作った円にたばこを挟む。彼女たちは男性と同じようなやり方でタバコの煙を吸い込む。たばこを全部吸うために、最後の部分は小さくきれいに切り、たばこ用パイプとして用いられる竹製の管に詰める。私はしばしば女性のようにたばこを吸い、それを彼らはいつも面白がった。 [Pignède 1993(1966): 60]

年代以降ネパールで興隆する民族運動の潮流の中で、民族の自称／他称をめぐる問題が顕在化しており、それに伴い研究者も他称であるグルンではなく、彼らの自称であるタム、もしくはタムマイを用いる傾向があるが、本稿では便宜上、彼らを指し示す場合グルンを用いる。

² 東ネパールに居住しているグルンの人々は、かつてシャハ家がカトマンドゥ盆地を制圧したのち東ネパールを統一する際に駆り出され、そのままその地に定着した人々だとされている。この東ネパールに居住するグルンの人々は、概してグルン語を母語として維持していない [Messerschmidt 1976: 2; 渡辺 2009: 50]。本稿ではこの東ネパールに居住するグルンに関しては扱わない。

グルン村落における人々の喫煙の様子についての記述はわずかにこの一節のみであるが、このピネードの記述からかつての喫煙風景に関して二つの点が指摘できる。一つ目は、ピネードが現地調査を行った 1950 年代後半、グルン村落では輸入物のインドたばこが流通していたという点である。これは、ネパール国内のたばこ産業が当時未発達であったことを考えれば納得のいくものである。カルキらによれば、1948 年にインド国境に近いビールガンジという街に半機械化されたたばこ工場が設立されたものの、ネパール国内の需要に対してその生産量は限られたものであったという [Karki et al. 2003: 10]。ネパール最初の近代的なたばこ工場は、ソビエト連邦からの技術的、資金的援助によって 1965 年に設立されたということであるから [Karki et al. 2003: 10; Jha 2002: 3]、ピネードが調査した 1950 年代後半当時、ネパール国産のたばこがグルン村落で流通していなかった可能性は多分にある³。

二つ目は、ピネードが調査を行った当時のグルン村落においては男女双方にたばこが嗜まれていたという点である。ピネードは直接的に男女双方とも喫煙すると述べているわけではない。しかしながら、男女による喫煙の際の手や指の使い方の違いに言及しているピネードの記述からは、当時男女双方ともにたばこが嗜まれていたであろうことが窺える。筆者がグルン村落において年配者を中心に行った聞き取り調査においても、現在は喫煙をしない年配女性も含め、かつては男女問わず皆が喫煙していたと多くの人が語っていた。先行研究や筆者による観察および聞き取り調査を踏まえると、冒頭で挙げたグルン語歌謡の歌詞の内容と現在のグルン村落の様子との齟齬は、過去と現在のグルン社会の喫煙者層の変化だと言える。つまり、かつて男女双方に親しまれていたたばこは時代の変化と共に男性のものとなっていったのである。そして現在も喫煙習慣のある年配女性は、かつて男女ともに喫煙していた世代である。

3. 3. 若者組ロディとたばこ

それでは、男女共に喫煙習慣のあった世代の人々は、かつてどのように喫煙を楽しんでいたのだろうか。その一端を示すのが、ロディ⁴の集まりにおけるたばこの贈与、交換である。ロディとはグルン社会における一種の若者組であるが、筆者の聞き取り調査および先行研究 [Bista 2011(1967): 102-104; Macfarlane 2003(1976): 215; Messerschmidt 1976: 49-54; Pignède 1993(1966): 267-268; Regmi 2002(1991): 47-49] を総合すると、おおよそ以下のように説明できる。

男性によって組織されるロディもあるが、ロディと言った際には基本的に女性のそれを指す

³ 本稿においてたばこは基本的に紙巻たばこのことを指している。ネパールでは紙巻たばこの他にも、水たばこや噛みたばこ、南アジアで生産されるビーディー等のたばこも流通している。聞き取り調査によれば、筆者が主に調査をする C 村においては、かつて水たばこも嗜まれていたとのことだが現在は流通していない。また、噛みたばこは現在でも流通している。しかしながら、水たばこや噛みたばこは双方とも本稿で取り扱うたばこの贈与や交換の対象外であるため、本稿では取り扱わない。また、筆者が観察した限りにおいて現在のグルン村落でビーディーは嗜まれておらず、また村落の商店においてもビーディーは販売されていない。かつて、グルン村落においてビーディーがどの程度流通していたのかについては、文献がないため不明である。

⁴ 本稿では便宜上、現地語（グルン語、ネパール語）はカタカナで記すこととする。

という点で、ロディは若者組であるとともに娘組とも言うるものである。ロディは数名から十数名で構成される。女性のロディの場合、各ロディにロディガルと呼ばれる若者宿——たいていはそのロディの成員のうちの誰かの家の一部屋——が設けられる。ロディの成員である女性たちは毎夜そのロディガルに集まっておしゃべりや手仕事などをして過ごし、寝泊りをするというのがロディの基本的な活動である。たいてい 8～9 歳から少女たちは、仲の良い友達同士で非公式的に夕飯を食べると誰かの家に集まりはじめ、時折そのままそこで寝泊りをするようになる。10～11 歳ごろになると、少女たちの集まりと集まり先での寝泊りがより継続的に続くようになる。さらにそのころになると、同年代の少年たちが毎夜彼女らのもとを訪れ、そこで男女共に歌や踊り、おしゃべりに興じるようになる。ただし、少女たちはそこで寝泊まりするが、少年たちは寝る段になると各々の家に戻っていく。後に儀礼が執り行われると、そのロディは社会的に認められた存在となる。夜間の集まりを中心としたロディの活動はおおよそ彼女らが 20 代半ばになるまで続き、成員である女性が結婚や出産を機に参加しなくなるとそのロディは徐々に解体する。

一方、男性のロディは女性のロディと同様に同年代の友人関係によって組織されるものの、女性のロディとは異なりロディガル、すなわち決まった集まり場所を持たず、またそのメンバーシップも流動的である。聞き取り調査によれば、このような男性のグループをロディと呼ぶか否かは村落や地域によって異なるようである。いずれにせよ、女性のロディほど厳密な組織もしくは集団ではなかったと言える。

すでに述べたように一つのロディの成員は数名～十数名であるため、人口規模にもよるが、一つの村落に複数のロディがあるということは決して珍しいことではない。男性のロディもしくはグループは女性たちの集まるロディガルを訪れるのだが、その組み合わせは固定的なものではない。男性たちがどのロディの集まりを訪れるかは自由であり、同一村落に留まらず、時に別の村落のロディを訪れることもある。

女性のロディの場合、ロディガルでの夜の集まりだけでなく、村で行われる様々な活動がロディを単位として行われる。例えば、農繁期における共同労働がそれにあたる。グルン村落では農繁期になるとノグルと呼ばれる男女混合の共同労働のグループが組まれる。ノグルの成員は全員で各成員の家の田畑で農作業を一日ごとに順に行っていく。10代～20代の女性の場合、ロディがノグルを組織する際の単位となる。ただし、彼女たちがどの男性のロディ（もしくは男性グループ）と共にノグルを組むかは固定的ではなく、その都度組み合わせは変わりうる。

以上がロディの概要であるが、ここで注意すべきは夜のロディガルにおける集まりにおいても、共同労働のノグルを組織する際の組み合わせにおいても、女性のロディと男性のロディ（男性グループ）との関係性は流動的であり、一回きりになることもあれば継続的な関係になることもあるという点である。

筆者がラムジュン郡のあるグルン村落で行った聞き取り調査によれば、先行研究でも指摘されている通り男性のグループは村内外を問わずどのロディを訪ねることもできるが、気に入ったロディに対しては、そのロディの女性成員の人数分のショールとミルク粥を贈ったという。

また、そのお返しにロディの女性達は米粉の揚げドーナツを男性グループに贈っていた。この贈与を通じて、贈り物をした男性ロディと返礼をした女性ロディの成員たちは特別な名前呼び合う仲になる。

先行研究によれば、こうしたロディガルでの集まりを軸とした男女間のモノの贈与・交換は、集団間だけでなく個人間でも行われていた。例えばメッサーシュミットは、「贈り物は互酬的に交換されるが、それは好意に基づいた個人間の親密な紐帯を象徴している。男性は女性に手作りの竹製の喫煙具（たばこ用パイプ）や櫛を贈り、女性は男性にカラフルなかぎ編みのハンカチを贈る」[Messerschmidt 1976: 51] と述べている。また、ロディの役割について研究したアンドースは、ロディにおける男女間のモノの交換について述べた部分で、男性から女性への贈与物の例として竹で作った雨よけ、櫛、喫煙具を、女性から男性への贈与物の例としてレガと呼ばれる植物の繊維から作った鞆を挙げている [Andors 1974: 20]。メッサーシュミットとアンドースがロディを介した男女間のモノのやりとりに関して記述する中で、双方ともが男性から女性への贈り物の代表例としてたばこ用パイプを挙げている点から、かつて村の若い女性達が喫煙していたであろうことが推察できる。

しかしながら、先行研究ではたばこそれ自体が当時男女の間でいかにやりとりされていたかについて述べられていない。アンドースが 1974 年に発表した論文によれば、彼女が調査した当時すでにいくつかの地域ではロディが消滅していたといい [Andors 1974: 10]、また筆者が長期調査をする C 村においても 20～30 年前にはロディがなくなっていたという。そして現在ほどのグルン村落にもロディは存在しない。そこで以下では、かつてロディが存在していた時代にロディガルでの集まりに参加していた人々が語るたばこのやりとりについて、聞き取り調査で得たデータをもとに見ていきたい。

〈事例 1〉

2016 年 7 月、筆者が長期調査をしている C 村の出身で現在は近郊都市ポカラに居住する 70 代の女性 A が、かつての C 村でのロディの様子について筆者に語った。彼女によれば、彼女がまだ十代だったころ、村には多くのロディがあったという。ロディの仲間とは夕方集まり、そして男性たちが来て歌を歌うなどして過ごし、時に朝方まで共に過ごしたのち男性たちは帰り、彼女たちはそのままそこで寝るというロディガルでの基本的な過ごし方について教えてくれた後、彼女は、彼女の属していたロディは人気が高く、夜には列ができるほど男性が来たのだと語った。さらに続けて彼女は以下のように言った。

A 「ロディに行くときはいつもたばこを一本ポケットに入れて行った」

私 「どうやって？」

A 「商店で買って」

私 「なんで？」

A 「男にあげるためだよ」

〈事例 2〉

10月のある日、C村において筆者とある30代男性は、彼の経営するゲストハウスの庭で話をしていた。筆者は彼の属する親族組織やかつてのC村における社会組織についての聞き取り調査をしていたのだが、話をしているうちに以前のC村における交易や牧畜の様子についての話に移行し、そして話はロディに移った。彼によれば、かつてであれば今のような季節だと、ロディガルに集まった女性たちは植物の繊維から糸をつむぐ作業をしており、訪れてきた男性たちの頭にその作業ででたごみに火をつけたものを乗せてからかっていたという。また、ロディガルでうたたねをしている人がいれば、鍋についた炭と油を混ぜたものを顔に塗ってからかうという遊びもしていたという。そして、男性はロディガルに訪れると女性にたばこをあげ、自己紹介や会話のきっかけにしていたと教えてくれた。

〈事例 3〉

2016年11月、筆者はラムジュン郡に位置するあるグルン村落で、70代の女性にロディについての聞き取り調査を行っていた。彼女はロディについて、「夕方になると女性たちは10~15人ほどロディガルに集まり、男性たちはそこに遊びに来てとても素敵な歌を歌う」と説明した。続けて彼女は、男性と女性の双方の役をしながら身振り手振りを加えてかつてのロディガルにおける男女のやりとりについて以下のように説明した。

女がたばこに火を付けて、男たちにおいしいからとすすめると、男たちは「いいよ、いいよ」と遠慮した。それでも女は「どうぞ、どうぞ」とすすめてお互いからかいあった。

先行研究においては殆ど記されてこなかったが、この三つの事例から、かつてロディガルでの集まりにおいては、男女の間でたばこの贈与がなされていたことがわかる⁵。その贈与は、冒頭で挙げたグルン語歌謡で歌われているように、男性から女性に対してなされるだけでなく、〈事例 1〉における女性Aの語りからわかるように女性から男性に対してもなされていた。そして、男女双方にとって、喫煙が何ら否定的な意味合いをもっていなかったことが推測できる。

3. 4. 現在の喫煙風景

グルン社会において喫煙率が下がり、たばこがほぼ男性のものになっていった歴史的経緯は定かではないが、筆者が聞き取り調査を行ったC村出身のある50代女性によれば、彼女たちがまだロディへと通っていた10代の頃、彼女や彼女の友人らはたばこを吸っておらず、「(たばこを吸うという)意識すらなかった」という。現在、若い女性による喫煙が、表立って道徳的

⁵ グルンだけでなく、ネパールにおける他の民族においても似たような場面でのたばこの贈与がなされる例がある。マガル族について研究する南は、マガル社会において、未婚の男女が夜通し「歌垣」をする場で男性が女性に贈与するものとしてはたばこが欠かせないと記している [南 2004: 205]。

によくないものとして語られることはない。筆者による「なぜ最近、女性達はたばこを吸わないのか」という問いに対しても、「(たばこを吸うのが) 好きではないのではないか」といったような答えが返ってくるのみで、それを道徳に違反することだとして語ることはない。現在のグルン村落では、若い女性はたばこを吸わないものとしてごく自然と受け入れられているのだということが以下の事例から窺える。

〈事例 4〉

2015年8月、C村において村内のゲストハウスや商店経営者、有力者、婦人会代表者らを中心とした会議が開かれた。会議では、C村出身であり海外で博士号を取得した男性がネパールの他地域における観光の現状や村落観光の可能性についてのプレゼンテーションをした後、今後C村の観光を推進する上での問題点等の議論が交わされた。議論の途中、会議を取り仕切っていた村の有力者が、「最近、(村人は) たばこを吸っているのか?」と尋ねた。それに対して答えたのは婦人会の代表者で、彼女は「娘たちは誰も吸いません。大人たちと、(男性の) 若者だけです」と答えた。

以上の事例において、婦人会の代表者は迷うことなく、娘たち、すなわち若い女性たちは誰もたばこを吸わないと答えている。実際、この発言は筆者のこれまでの経験ともおおよそ合致している。筆者はこれまで通算約2年半C村において現地調査を行ってきたが、若い女性が人目を気にせず屋外でたばこを吸う姿を目撃したのは、たった一度である。

〈事例 5〉

2016年10月、C村から歩いて3時間ほどのところにある別のグルン村落に、その村に嫁いだC村出身の20代女性と一緒にいったときのことである。C村から歩いてその村落へと向かい、村に着いてから彼女の婚家までの道すがら、筆者と彼女は歩きながらたばこを吸う10代~20代と思しき女性の姿を目撃した。その姿を見て筆者と一緒にいた彼女は一瞬足を止め、「あんな風にしている [喫煙している]」と驚いたように、しかし小声で筆者に伝えてきた。

事例4における婦人会代表の女性の発言と事例5における20代女性の驚きは、現在のグルン村落における若い女性の喫煙に対する一般的な認識を端的に表していると言える。若い女性は喫煙せず、年配女性と男性のみが喫煙するという認識は、実際的な状況とほぼ合致していると言えるが、個々人の実践はより具体的な関係のなかに埋め込まれている。

〈事例 6〉

2017年2月、C村で筆者がホームステイする家の中に入ると、そこには筆者が兄と呼ぶ家主の男性とその妻、そして彼女の姉(E)がいた。Eは普段は村ではなくポカラに住んでいるが、その時はたまたま村に滞在していた。筆者が家の中に入った時、3人は囲炉裏の周りに座って

おり、喫煙者である家主があげたであろうたばこを E が吸っているところであった。普段はたばこを吸わない E が、たばこをふかす姿を見て少し驚いた筆者に向かって、E は「夫には言わないでね」と言った。しかしながら、実のところ筆者が、E がたばこを吸う姿を目撃したのは二度目であった。一度目も周りにいたのは同じ人物であり、またその際にも E は筆者に「夫には言わないでね」と言っていた。

〈事例 7〉

C 村に居住するある 20 代男性は普段からたばこを持ち歩き、喫煙するが、彼と筆者との間で以下のような会話を交わしたことがある。あるとき、筆者と彼は村内の道で偶然出会い、おしゃべりをしながら一緒に歩いていた。すると彼は自分のたばこを切らしていることに気づき、たばこを買いに行くと言って歩いてきた方向へと逆戻りしようとした。筆者は私たちが向かう方向に彼の父方オジ一家が経営する商店があることを知っていたため、そこで買えばいいじゃないと彼にすすめたが、彼は「ダメだ」と答えた。筆者が「なぜ？」と尋ねると、彼は「オジから（たばこを）買うことはできない」と言った。筆者は、彼が喫煙者であることは周知の事実かと思っていたため、続けてなぜかと尋ねた。すると彼は、「オジの前ではたばこは吸わない」と答えた。

〈事例 4〉において語られたように、一般的に現在若い女性は喫煙しないと認識されているが、実際は必ずしもそうではないという例を〈事例 6〉は示している。ただし、〈事例 5〉のように公然と喫煙する姿は批判的視線に晒される。また、〈事例 7〉は喫煙が是認されているはずの男性であっても、個人的な視線を意識していることを示している。

4. 考察

4. 1. ロディガルにおける日常的交換物としてのたばこ

まず、かつてグルン社会において男女双方に親しまれていたたばこが、特にロディにおいてどのような機能を担っていたのかという問いについて考えてみたい。これは、ロディガルにおける集まりを介した男女間のモノのやりとりという観点から、たばこと他の贈与物とを比較することにより明らかになるだろう。

第 3 章 2 節では、ロディを介した男女間の贈り物の例を 3 つ挙げた。一つ目が、男性のロディから女性のロディへと贈与されるショールとミルク粥（とその返礼に贈られる揚げドーナツ）であり、二つ目が個人的に贈与・交換される竹細工や手工芸品、そして三つ目がたばこである。

一つ目は、ある特定の女性のロディと男性のロディとの間の関係性をより強固にするための、集団間で行われる贈与である。すでに述べたように、女性のロディと男性のロディとの関係性は固定的ではなく、男性らが夜にどのロディの集まりを訪ねるかは自由であった。しかしながら、裏を返せば、それは女性のロディにはいくつもの男性グループが訪ねてくる可能性もあるということである。〈事例 1〉に登場する 70 代女性 A が、自身の属するロディの集まりには列

ができるほど男性が来たと述べていたことからわかるように、男性側からすれば競争的でもあったということである。そのため、男性のロディは特定の女性のロディとより強く結びつくためにモノの贈与によって、特別な名前呼び合う、より継続的な関係性を作り上げた。

二つ目は、集団間で贈与される一つ目とは異なり、男女が個人間で贈る竹細工や手工芸品である。その例として、メッサーシュミットによる男女間の贈与に関する記述を挙げたが、その直後に続く段落で、彼は以下のように述べている。

恋愛的な冒険は明らかにこのような相互作用から生まれる。ある若い男性が巧みに述べたように「ロディとは男性と女性がお互いの本質を理解するのを手助けする」。ロディのお父さん⁶である別の村人は、ロディとは結局のところ女性が「楽しむ」場所であり、結婚に先駆けて経験を得る場所である。ある老年の女性はより直接的に言った。「ロディにおいて女性は愛（マヤ）⁷をみつける」。*[Messerschmidt 1976: 51]*⁸

ここでの「このような相互作用」とは明らかに前段落に書かれた男女間の竹細工や手工芸品の贈与・交換のことを指している。すなわち、ロディの集まりは男女間の恋愛関係を生み出す場でもあり、モノの贈与・交換が特定の男女二者間の特別な関係性の構築を後押ししていたというわけである。

一方で、三つ目のたばこの贈与はというと、より気軽なものである。すでに述べたように、ロディガルへと訪れてくる男性グループは固定的ではないため、女性から見ればロディガルにおいて共に過ごす相手は毎日変わりうる。それを踏まえて〈事例 1〉の 70 代女性 A による、男性にあげるために「いつも一本たばこをポケットに入れていった」という語りを解釈するならば、彼女は特定の人物にあげるためにたばこを持っていったというよりは、その日にロディガルで過ごす誰かにあげるためにたばこを持っていったと解釈できるだろう。このことは〈事例 2〉に登場する 30 代男性が、ロディガルでたばこを女性にあげることによって自己紹介や会話のきっかけとしたという言葉からも窺える。すなわち、ロディの集まりにおけるたばこの贈与の対象は誰にでも開かれたものだったのであり、たばこはその時その場所でなされるコミュニケーションのための汎用性の高いツールの一つであったのだと考えられる。〈事例 3〉では、たばこの贈与を介した男女のからかいあいがある当時どのように行われていたかに関する具体的な様子が語られているが、これがロディガルというたまり場における日常的な交流の様相であった。

⁶ 各ロディにはロディガルを提供し、ロディを管理するロディの「お母さん」、「お父さん」がいる。たいてい彼らはそのロディの成員の内の誰かの両親である *[Andors 1974: 13; Messerschmidt 1976: 50]*。

⁷ マヤとはネパール語で「愛、愛情」を意味する。

⁸ メッサーシュミットのこの記述は明らかにロディガルにおける、もしくはロディガルでの交流を通じた男女の性的関係について示唆している。他の先行研究においても、ロディにおいて男女の性的関係があったことが指摘されている *[e.g. Macfarlane 2003(1976): 215]*。ただし、アンドースはロディの機能として性交渉の経験を過度に強調する見方には意義を唱えている *[Andors 1974: 10]*。

4. 2. ノスタルジアを彩るたばこ

第3章3節では、現在のグルン村落における喫煙風景の一端を示す事例を提示した。そこでは、現在のグルン村落において喫煙するのは男性と年配女性のみで若い女性は喫煙しないという、本研究計画開始以前に筆者がグルン村落における観察から導き出した結論とおおよそ同じ認識が現地の人々自身によってもなされているという点を指摘した。それと同時に、そういった認識からは零れ落ちる、より微細な人間関係に埋め込まれた個人の喫煙をめぐる実践の様子についても紹介した。

ここで筆者が改めて注目したいのが、第3章2節で挙げたようなロディとたばこをめぐる語りが現代的な文脈において生起しているという点である。すでに述べたように、現在グルン村落にロディは存在しない。しかしながら、〈事例 1~3〉で挙げたようなロディを懐かしむ語りは現在も様々な場面で聞かれる。冒頭で挙げたグルン歌謡もまた、ロディの表象に用いられる。この曲の歌詞自体にその場面がロディガルにおける男女の集まりだという言葉はないが、近年催されるグルンの文化プログラム等でこの曲を用いて踊りが披露される際には、時にロディの一場面として表象される⁹。

こうしたロディを懐かしむ語りや表象には、一種のノスタルジアがあると言えよう¹⁰。ホッピーと居酒屋について議論した藤野陽平は、過去への郷愁・ノスタルジアの特色として、本人が体験していなくても感じるものであること [藤野 2016 : 45]、さらに、現在と過去を対比させるその語り口において当時のマイナス面は等閑視される傾向にあると指摘しているが [藤野 2016 : 59]、この藤野の指摘するノスタルジアの特色は、ロディに関する現代の語りや表象にも見られる。それはかつてのロディに関するグルンの人々の語りと今日の語りとを比較することで明らかになる。

1950年代後半に現地調査を行ったピネードは、ある若いグルンの男性にロディについて尋ねたが、その際に彼は「今日、ロディは以前よりも栄えていない。これはよいことだ。若い男女が夜に会うのはよいことではない。他のネパール人は決してそんなことはしないし、彼らは、私たちのモラルはだらしがないと言って私たちの慣習を批判している」と述べたという、またピネードはこの種の語りをしばしば耳にしたと書き残している [Pignède 1993(1966): 220]。ここでは明らかにロディのマイナス面が指摘されているが、このようなマイナス面は今日のロデ

⁹ 例えば、C村主催で行われた文化プログラムにおいてこの曲を用いた踊りが披露されたが、その際には曲の冒頭と最後に、ロディガルに集まる男女の様子とロディガルから男性が帰っていく様子を演じた寸劇が挿入されていた。

¹⁰ ただし、すべてのロディに関する語りや表象にノスタルジアがあるわけではない。例えば、2008年に製作されたグルン語による映画『ロディガル』では、あるグルン村落のロディにおいて問題——特に、ロディガルでの男女の集まりを契機とした未婚女性の妊娠に関する問題——が発生し、そのロディガルが閉鎖に至るまでの物語が描かれている。映画の最後には「今日ロディは終焉した。婦人会や青年組織が設けられ、ロディのような働きをしている」という字幕が付されている。ノスタルジックなロディ表象では主にロディガルにおける男女間の交流の楽しみに焦点が当てられる一方、この作品はフィクションではあるものの、ロディをきっかけに起こった問題や衰退期のロディの様子的一端を示している。

ィに関する語りや表象には表れにくい。〈事例 2〉で挙げた 30 代男性は、ロディについて語る中で、かつてのロディガルでは男女がより親密にしていたことや、逢引きの仕方、駆け落ちの例について語っており、また〈事例 3〉の 70 代女性もまたしばしばロディの仲間たちは駆け落ちの手助けをしたという話をしたが、それは決してネガティブなものとして語られなかった。

今日、若い女性による喫煙はほぼみられなくなったが、このようなノスタルジアの語りの中ではたばこは捨象されず、むしろ場合によっては前景化してもいた。第 3 章 2 節で挙げたロディにおけるたばこの贈与に関する事例は、実のところどれも筆者がたばこに関する質問をしたことによって得られた語りではなく、かつての村落生活やロディに言及するなかで彼らが自発的に語ったことであった。彼らの語りの主題はロディであったが、その懐かしきロディガルの一場面として、すなわち、ロディガルでの男女間のやりとりの機微を言いあらわすために、彼ら自身によってたばこの贈与が挙げられていたのである。以上を踏まえ、現在のグルンの人々によるロディに関する語りにもノスタルジアがあるとすれば、たばこはそのノスタルジアを彩る一つのモチーフであると捉えることができる。

5. 結論

本研究は、グルン社会における喫煙行為の社会的意味を、特に若者組ロディとのかかわりから明らかにすることを目的としたものであった。文献研究と現地調査を通じ、かつてのグルン村落においては、ロディの集まりにおいて男女間で行われるたばこの贈与・交換が他の贈与物とは異なり日常的にやりとりされるモノであったこと、また現代のグルン村落においては若い女性はたばこを吸わず、男性と年配女性は喫煙するという認識があるものの、個人レベルで言えば、より具体的な人間関係に埋め込まれた喫煙実践がなされているという考察を得た。また、現代において過去、すなわちロディを語るという実践に焦点を当てることにより、それがノスタルジックなロディの表象であり、男女間のたばこの贈与や交換がその表象を手助けする一種のモチーフとして用いられていることを指摘した。

研究計画当初に掲げた三つの目的のうち、グルン社会における喫煙層が変化した歴史的経緯については今回の調査で明らかにすることはできなかった。グルン社会の置かれてきた歴史的状況に鑑みれば、たばこをめぐる道徳観念の変化は、学校教育の普及や周辺の他文化からの影響、西洋近代医療の拡大等の要因が推測できるが、今後の課題としてこれからも検討していきたい。

6. 引用文献

Andors, Ellen, "The Rodighar and It's Role in Gurung Society.", *Contributions to Nepali Studies*, Vol.1(2), pp.10-24, 1974.

Bista, Dor Bahadur, *People of Nepal*, Ratna Pustak Bhandar, 2011(1967).

Central Bureau of Statistics (Government of Nepal, National Planning Commission Secretariat), *National Population and Housing Census 2011 (National Report)*, 2012.

- Jha, Rajani, *Study on Working Capital Analysis of Janakpur Cigarette Factory Limited*, Master's Thesis, Tribhuvan University, 2002.
- Karki, Yagya B., Kiran Dev Pant and Badri Raj Pande, *A Study on the Economics of Tobacco in Nepal*, The World Bank, 2003.
- Macfarlane, Alan, *Resources and Population: A Study of the Gurungs of Nepal*, Ratna Pustak Bhandar, 2003(1976).
- Messerschmidt, Donald A. *The Gurungs of Nepal: Conflict and Change in a Village Society*, Aris and Phillips, 1976.
- Pignède, Bernard *The Gurungs: A Himalayan Population of Nepal*, Ratna Pustak Bhandar, 1993(1966).
- Regmi, Murari Prasad, *The Gurungs: Thunder of Himal: A Cross-Cultural Study of Nepalese Ethnic Group*, Nirala Publications, 2002(1991).
- 藤野陽平、「ホッピーが醸し出すノスタルジア——『昭和』から感じるなつかしさ」、『ホッピー文化論』、ホッピー文化研究会（編）、pp,41-61、ハーベスト社、2016。
- 南真木人、「ネパール・マガル人のか嗜好品的なるもの」、『嗜好品の文化人類学』高田公理・栗田靖之・CDI（編）、pp.198-207、講談社、2004。

7. 英文アブストラクト

Rodi and Smoking Culture among the Gurungs in Nepal

Nanako YOSHIMOTO

Tokyo Metropolitan University

The aim of this study is to examine smoking culture that include gift and exchange of cigarette among Gurung people in Nepal, focusing on *Rodi*, youth association of Gurung. My data corrected by fieldwork in Nepal and reanalysis on writings about Gurung result in following. Nowadays young women don't smoke in Gurung villages, whereas men and old women smoke. But once both of men and women, the young and the old smoked cigarette a lot. *Rodi* is a kind of youth association in Gurung society and now is disappeared. *Rodi* is essentially girl's association and girls of a *Rodi* gather in *Rodighar*, like dormitory, in evening and stay at night. Boys also come *Rodighar*, girls and boys enjoy chatting, singing, etc. Cigarette is one of gift given or exchanged between boys and girls in *Rodighar*. Comparing with other gifts, like bamboo works and handmade works, gift of cigarette is frankly and daily exchanged between boys and girls in *Rodighar*.

Cigarette can be given to anyone in Rodighar and a broad-used tool of communication. Today's representation of *Rodi* and interaction between boys and girls in *Rodighar* have nostalgia because *Rodi* is lost culture of Gurung. Description of gift and exchange of cigarette between boys and girls in *Rodighar* decorate nostalgic representation of *Rodi* brightly.